

〈書 評〉

ゲルノート・ベーム著、河村克俊監訳

『新しい視点から見たカント『判断力批判』』

(晃洋書房、2018年)

宮崎 裕助

現代ドイツを代表する哲学者の一人ゲルノート・ベームは、カント業界では弟ハルトムートとの大部の共著『理性の他者』(1983年)によってすでに知られるところであろう。しかしながら、ベーム兄弟の主著といってよいこの著作は、残念ながらいまだ日本語では読めないのが現状である。

ゲルノート・ベームの著作は、日本語の文脈では、カントや哲学史に密着した研究よりも、美学者としての仕事のほうが紹介されてきたといつてよい。すなわち「雰囲気の美学」ないし、より広義では「感覚学の美学」を提唱する感性論の研究である(こちらには同題名の日本語の訳書がある)。

初期のカント研究と、それ以後の美学研究——とはいえ、その両面のあいだに分裂はない。『理性の他者』で焦点となっていたカント像は、いわゆる理性主義ないし啓蒙主義者としてのカント、あるいはそれと関連して打ち出される道德の嚴格主義者としてのカント、あるいは永遠平和を掲げる理想主義としてのカントといった定型像ではない。そうではなく、それは、いわば情動に突き動かされた「身体の生動性」に繊細な関心を払っているカント像であり、そこでは、美学の問いへと接続されてゆく広義の感性論(エステティクス)がすでに焦点となっていたのである。

このたび公刊された本訳書は、文字通りその両面の結節点をなす。すなわち、文字通り美学を主題化しているカントの著書『判断力批判』にベームが取り組んだ著作である。

本書そのものはけっしてベームの仕事にとってメインストリームをなす著作とは言えないかもしれない。本書は原著(1999年)では130頁ほどの小著であり、他の著作と比べるとベーム自身の独自テーゼを打ち出すというよりは、一見『判断力批判』の註釈にとどまっている。

しかし(本誌学会の会員のような)カントの読者にとっては、だからこそ、本書はベームの思考の手つきがよくわかるものとなっていると言えよう。つまり、カントの著作にある程度慣れ親しんできた読者にとってみれば、ベームがカントの議論のどこに注目し、いかなる視点からそのテキストに切り込むのか、という点において、彼の思考の実際のあり方が際立つのである。

付言すれば、本書は、『判断力批判』の註釈書という面は大きいものの、けっしてカントのたんなる補足物にとどまるものではない。本書の題名が掲げる「新しい視点」によれば、『判断力批判』をこれから読もうとする人にとっても、一定程度カント内部の問題設定から独立して本書を興味深く読み進めることができるだろう。

本書は、一方では、カントが生きた18世紀ヨーロッパの後期啓蒙思想および近代市民社会の勃興期における美学思想のコンテクスト、他方では、1980年代以降のヨーロッパ現代思想で流行した崇高論、とりわけその主導的な位置にいたジャン＝フランソワ・リオタールの著作の余波というコンテクスト(ベームはリオタールのカント崇高論研究書の編者もしている)、その二つの文脈を『判断力批判』へのアプローチにとって不可欠な背景として設定している。そこから、本書のいう「新しい視点」が切り出されるのである。

では、本書のいう「新しい視点」とは何か。本書はまず次の点で従来のカント研究から距離を置こうとする。既存の研究によれば、カントの著作は「きわめて難解であるため、あらゆる世代のカント研究者たちは、まず、とにかくにも彼を全般的に理解することに心血をそそがなければならない」(xiii 頁。以下、丸括弧内に本書の頁数を示す)のである。したがって、カント研究とはカント自身の立論の解明がなによりも重要なのであり、カントの著作の内的な整合性を証示したりその欠陥を正したりしながら、その体系化の正当性や一貫性を理解し主張することが必要不可欠だということになる。

こうした読解態度はもちろん間違っていない。しかし、こと『判断力批判』にあっては、そうした正面突破一本やりのアプローチでは不十分だ、というのがベームの見立てである。ベームが企てたのは、ある種テキストを突き放しながら「斜に構えて読む(querlesen)」(4頁)仕方、ゲーテが「のめり込みはしないにせよ、それをできるだけ役立てる」と述べたような読解の仕方である。

具体的にはそれは『判断力批判』に出てくる「実例(Beispiel)」に着目することである。『判断力批判』の読者なら知るように、カントは自身の議論を練り上げてゆくなかでしばしば具体例を出す。カント美学の範型をなすのは自然美、たとえば、チューリップやバラのような草花、あるいは貝などの甲殻類、羽毛や水晶であり、動物ではナイチンゲールや馬が出てくる。

ここで重要なのは、カントは自然に存在するものだけを比較すべき例として挙げているわけではない点である。自然物をモチーフとした人工物、室内装飾、家具調度、葉形をあしらった壁紙、遊歩庭園、等々も含まれる。ベームはこれを、現代の言葉で「デザイン」と呼ばれる領域のものであると要約している。

カントがこうした例を持ち出す仕方はいささか唐突なところがあり、そうした発想の典拠を示すわけでもなく、なぜその例でなければならないのかを十分に説明しているようには見えない。カント自身は諸美術や芸術作品についての知識が乏しく、畢竟そのような素朴な例しか挙げられなかったただだとみる向きもあるだろう。

従来の『判断力批判』の理解が、当のテキストの射程をカントという人間の個人的能力の経験的限界に押し込めようとしていたとすれば、それに対してベームがとる読解手法とは、そうした諸実例から浮かび上がってくる「間テキスト性」というべき余白をひとつひとつ丁寧に埋めていくという仕方である。

カントが芸術作品に疎かったことは事実だとしても、カントの何気ない言及や注記、あるいは伝記や同時代の記録等の調査によってベームが喚起しているのは、カントがディドロ、シャフツベリ、バーク、ハチソン、さらにはヴィンケルマンやレッシングなどの17～18世紀当時のさまざまな美学的言説に通じていたということである(14頁)。カントが自然美学やそれをモチーフとしたデザインのうちに趣味判断の範型をみてとったその発想は、カントの生きていた18世紀の美的経験のうちに明確に跡づけることができるのである。

そこからベームが引き出す帰結のひとつは、カントがロココの人間だということである(22頁等)。カントが範型としたデザインは、ルイ15世、ルイ16世の家具調度、後期バロックのスタッコ装飾や懸華装飾等、要するに「ロココ」と呼ばれる美的趣味に適合するものである。ベームはまた、カントがハーマンを介してイギリスの画家ウィリアム・ホガースの著作に出会ったことにも注意を向けている。そこからわかるのは、カントが美の範型とした線描デザインが、ロココの線だということにほかならない。

意図的であるか否かはさておき、カントは例を挙げるのに、自身の発想を支えている参照先を適切な仕方では明らかにしていない。ベーメはそこでカントのテキストの行間に自身の該博な学識を投入し丹念な文献博捜を通じてカントが基づいている美的経験の背景を明示化していくのである。これは『判断力批判』のたんなる註釈を超えて、18世紀ヨーロッパに根づいたひとつの典型をなす美的経験の広がり示してみせてくれるという意味で非常に興味深いものだ。

誤解してはならないのは、ベーメが、そうした文献学的考証を通じてカント美学を時代に制約された美的様式のひとつへと還元しようとしているわけではないという点である。ベーメの議論は、カントの発想の源泉を突き止める、謎解きにも似た興味をかき立てることは事実だが、本来の主眼はそこにはない。そうではなく、ベーメはこうした論点を契機として、家具調度をはじめとした人々の日常生活に根ざした装飾やデザインをカント美学が指向していることを示したうえで、その射程が多くの市民に開かれた日々の生活世界に及ぶということを強調するのである。

ここには要するに、ヨーロッパ啓蒙期の近代社会の市民が基づく趣味判断のパラダイムが素描されているのであり、人々の共有する共通感覚の枠組を提示することによって、市民的教養の開化と陶冶を推進することが目指されているのである。社会的で流行に敏感でもあったというカント像は、頭の堅い理想主義者で厳格なモラリストといったしばしば流布しているカント像とは異なり、ここに来て、ようやくカント美学との関連のなかでその理論的な実質を得るのだと言うことができるだろう。

以上は第一章の議論の筋をたどったものだが、続く章でもおおむね実例とそれが背景に擁する間テクスト的な連関を明示するという読解手法がとられている。第二章は挿入的な短い章だが、「スマトラの胡椒園」という例をめぐって、それを描写した同時代の著者ウィリアム・マースデンとカントの見解の距たりが書き留められている。

第三章は『判断力批判』第42節「美しいものに対する知性的関心について」の有名な一節に読み取られる「自然の言葉＝語り (Sprache)」や「暗号 (Chiffreschrift)」をめぐっての分析である。ここでは「自然という書物」の伝統、パラケルススやヤコブ・ベーメの神秘主義や言語哲学が背景にあること、カント自身はハーマンを経由しつつ、そのような伝統に遡行していることが明らかにされている。

こうした読解手法は、崇高論を取り上げる場合にとりわけ威力を発揮するであろう。第四章は、冒頭にも述べたように、20世紀において崇高論の新たな読解のコンテクストを切り開いたジャン＝フランソワ・リオタールの『判断力批判』研究との対決が図られている。リオタールがカントの崇高論を「呈示しえないものの否定的な呈示」としてあくまで前衛芸術の理論的支柱として捉えようとするのに対して、ベーメは続く第五章において、カントの引き合い出している自然を介した崇高なものの対象、すなわち、アルプス山脈への言及から、カントが自然神学の伝統との対決を図っていることを看取り、シャフツベリやアディソンといったイギリスの美学的言説のうちにカントの崇高論が成立した発想の素地を明らかにしていくのである（なお、自然神学ないし物理神学との対決については、第六章では『判断力批判』第64節の一節に関して目的論的推論の観点から検討されている）。

しばしば言われるように、カント自身はアルプス体験を実地ではたわけではない。地質学者および気象学者オラス＝ベネディクト・ド・ソシュール（彼は有名な言語学者フェルディナン・ド・ソシュールの曾祖父にあたる）のアルプス旅行記に依拠しつつ、高く聳える山脈の連なりが喚

起する美的経験を想像してカントはその崇高論を執筆したにすぎなかった。ケーニヒスベルクに退きこもっていたカントは、アルプスに限らず、例を引いてくるそのほとんどに関して自分の体験に拠らず、当時の書物の定型的な記述を頼りに『判断力批判』の議論を展開していったのであった。

こうしたカントのいかにも超越論哲学者然とした反経験主義的な美学理論は、直感を重んじる美学者たちによって頻繁に揶揄の標的にされてきた。しかしながら、カントの事例のうちに間テクスト的な連関を丁寧に読み解いていくベーメの崇高論読解は、むしろこうしたカントの立論にこそ18世紀美学の広がりとその限界を見いだす。すなわち、本書は、他の著作を介した事例に基づいて、いわば「テキストの崇高」（という言い方をベーメはしていないが）を呈示する『判断力批判』のこうした美的態度にこそ、近代社会の美的共同体の成立にとってカント美学が担う普遍的な射程を解明するのである。

ベーメ自身は十分に論じているように思われないが、評者からすると、『判断力批判』を事例に基づいて読解するという一見搦め手のベーメの読解手法は、そこで呈示されている美感的判断力の内面的論理からも十分に正当化されうるものだ。というのも、『判断力批判』前半の主眼をなしている美感判断力は、原理上規定的ではなくあくまで反省的にのみ下されるからである。とりわけ趣味判断の場合には、その対象が美しいのは、いかなる関心もなしに、概念なしに、目的の表象なしに、というように「ないないづくし」による「否定美学」（5頁）という様相を呈することになる。つまり判断の規定根拠は、概念や関心などの当の判断に先行する審級から論理的に導出することはできず（導出してしまえば「規定的判断力」の対象になる）、心の純粹に主観的な状態に照らして反省的にのみ得られるほかはないのである。

このことが具体的に意味していることは、反省的判断力がどこまでも当の主観が直面する個別の対象（事例）にかかわるほかないということ、さまざまな事例を通してのみその判断の普遍的な妥当性が得られるのだということである。この種の妥当性をカントは「範例的必然性」と呼んでいたことを銘記しなければならない。「この必然性は、美感的判断において考えられる必然性として、たんに範例的(exemplarisch)と呼ばれることができるのであって、言い換えれば〔それ自体としては〕呈示されることのできないある普遍的規則の実例とみなされる判断に対して、すべての人が賛同することの必然性である」（『判断力批判』第18節）。

つまりカント自身は、美感的判断力の普遍妥当性を、個々の実例＝範例によってこそ浮き彫りにし（規定的根拠なく否定的に）基礎づけていたことになるのである。まさしく『判断力批判』自体が、そのように書かれており、そのようなものとして読解しなければならないということである。

ベーメは「緒論」においてジャック・デリダの『絵画における真理』（1978年）のカント論を実際に読むことなく参照している。実のところ、ベーメより20年も先にデリダはこうした範例に照らした『判断力批判』の読解の道を切り開いていた（この点については、拙著『判断と崇高』知泉書館、2009年、68頁以下を参照）。ベーメがみずからの崇高論研究の先駆としてリオタールとの綿密な対決を図っているのはこのうえなく適切であったにせよ、おそらくそれ以上に本書は、デリダとの対決、少なくともデリダとの対話が必要であったであろう。

現在では、カントの『判断力批判』の議論を「事例」の特異性に着目して究明するという研究はベーメに限ったことなく、すでに数多くの研究がなされている（さしあたり、David Lloyd, Irene E. Harvey, Alessandro Ferrara, Olivia Custer らの研究があるとのみ述べておく）。そう

であるにしても、ベーメの『判断力批判』読解は、できるだけ多くの事例を扱うとする網羅性、またそれらが背後に擁する文脈の広さと詳しさ、狭義のカント研究にとどまらない学識の該博さという点で他に抜きんでている。

本書は、刊行からすでに20年を経たいまでも、『判断力批判』に本格的に取り組もうとする者は必ず経なければならない読解の水準をもたらしているということは疑いを容れない。今回日本語に翻訳されたことで、本書は『判断力批判』を読むための優れた手引きとなるだけでなく、日本語圏の『判断力批判』の研究水準をさらに押し上げる貢献を果たすにちがいない。

最後に訳業について申し添えておきたい。『判断力批判』の日本語訳では「適意」や「満足」が定訳となっている「Wohlgefallen」が本書では「愉悦」となっている点は賛成できない。美感的判断力の反省的根拠となっている「快(Lust)」は、一切の関心を欠いていると言われるが、適意(Wohlgefallen)は、それ自体としては感官にとって快適なものや概念的に善いものといった関心に結びつくものとしても言われており、美感的判断の成立にとってなるべく中立的な訳語を選択する必要がある。「愉悦」という訳語はあまりに「快」寄りの積極的な言葉であり、不要な先入見を導きかねない訳語である。

また本書の「日本語版のための序言」でベーメは本書の「カント美学に出てくる諸々の事例の索引」(viii)に言及しているが、この索引は本訳書のどこにも見当たらない。どうということかと読者は訝しむだろうが、本訳書では、原書に掲載されていた事例の索引が断りなしに割愛されているのである(!)。好意的にとれば、訳者は事項索引がこれを兼ねるとみなし省略したのかもしれない。しかし、だからといってその情報が網羅的にカバーされているわけではなく、省略するならするで説明が必要である。こうした割愛は、原書ではわざわざ独立して索引を設けたベーメの意図を明確に損なうと言わざるをえない。事例分析は、まさに本書の重要な論点だからである。本書の版を重ねることがあれば、ぜひこの索引の日本語版を作成し、増補していただきたいと思う。